

事業紹介書

ドライブイン展覧会「類比的鏡／The Analogical Mirrors」



事業概要

ドライブイン展覧会「類比的鏡／The Analogical Mirrors」

—
京都と滋賀の県境に位置する共同アトリエ「山中suplex／Yamanaka Suplex」にて、
関西を拠点に活動するスタジオ利用アーティスト11名と、海外からのアーティスト4名による
ドライブイン展覧会「類比的鏡／The Analogical Mirrors」を開催。

—
日時: 2020年11月6日(金) — 12月6日(日)／17:00 — 22:00(会期中の金土日祝のみ／全16日間)

会場: 山中suplex(〒520-0017 滋賀県大津市山中町91)

入場料: 3,500円(車1台につき)／完全予約制

※18歳以下の同乗者1名につき、500円の割引(最大2名まで)

アーティスト: アンドラーシュ・チェーフアルヴァイ(スロヴァキア)、石黒健一、小笠原 周、
木村 舜、小西由悟、小宮太郎、坂本森海、本田大起、
パトリツィア・プリフ(ポーランド)、前谷 開、宮木亜菜、若林 亮、和田直祐、
ヤロスワフ・コズウォフスキ(ポーランド)、ユ・チェンタ(台湾)

キュレーター: 堤 拓也

—
[チケット取り扱い]

入場料: 3,500円(車1台につき)[完全予約制]

取扱フォーム: Coubic [24時間受付・事前決済・当日精算可]

<https://coubic.com/yamanaka-ruihi-2020/505641>

お支払い方法: 事前決済=クレジットカード、当日精算=PayPay

※新型コロナウイルス感染症防止のため、現金のお取り扱いはございません。事前決済、あるいは当日の電子決済をご利用ください。

[入場可能な自動車の種類について]

場内での鑑賞ルート都合上《全長4.8m・幅1.85m》を超える大きなお車ではご来場いただけません。

以下の「対象」に当てはまる車種でお越しください。

—
アシスタント|黒木優花、周山祐未、

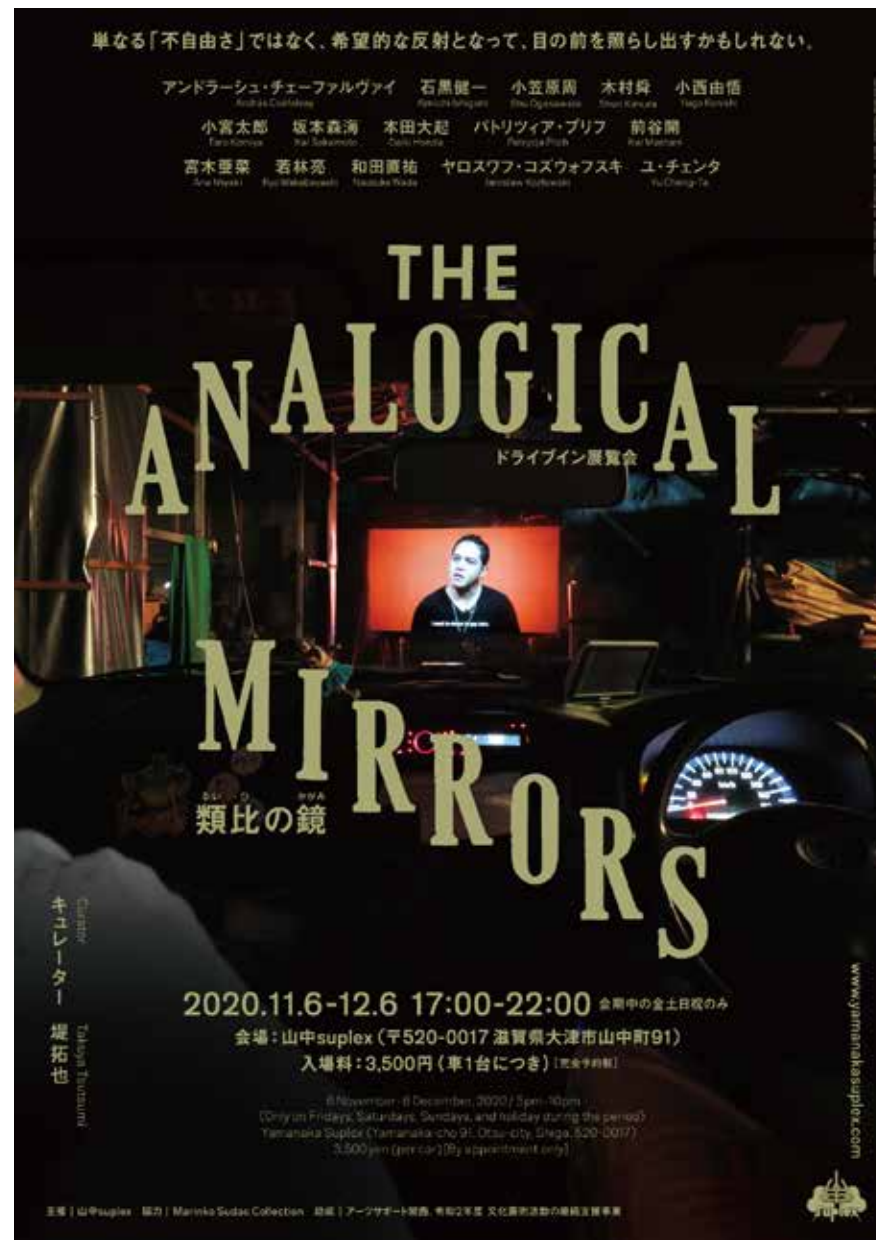
グラフィックデザイン|UMA/design farm(原田祐馬、平川かな江)、インストレーター|耕三寺功三、

サウンド|荒木優光、ライティング|十河陽平、受付役|諸江翔大朗

—
主催|山中suplex／Yamanaka Suplex

協力| Marinko Sudac Collection、室津日向子

助成|アーツサポート関西、令和2年度文化芸術活動の継続支援事業、未来につなぐしが文化活動応援事業



広報イメージ(B2フライヤー)

事業概要

ドライブイン展覧会「類比的の鏡／The Analogical Mirrors」

—

[キュレーターズ・テキスト1]

ずっとずっと昔にも、このコロナみたいなウイルスは存在していて、ちょっと前のあなたと同じみたいに、気軽に外に遊びにいけなくなったり、誰かと一緒にごはんが食べられなくなったりしたことがあった。つい先日はテレビを通じて、偉い男の人たちが「外出するのを控えましょう」と、感染を防ぐためにお願いしていたけれど、たとえウイルスがなかったとしても、自由に旅行に出たり、好きなものを読んだり、表現したり、どこかに集まることができない時代があったんだ。

罹患(りかん)することはたしかに怖い。もしかしたら喉がすごく痛くなるかもしれないし、咳が止まらなくなって、熱だつて出るかもしれない。でも、一番悲しいことは、あなたが大切な誰かにウイルスをうつしてしまって、苦しませることだと思う。だからそれを予防するために、手洗いをし、マスクを忘れず、じっと家で過ごすことは完全に正しい。

ただ、同時に知っておいてほしいことは、急に学校に行けなくなって、友達にも会えなくなって、つらい思いをした人たちがいる一方で、そういう「退屈な」時間の中にも自分なりに楽しむ方法を見つけてきた人たちがいるということ。彼女や彼は、すごく偉い人が「これをしてはダメ!」と怒っていたとしても、「これはいいでしょ?」と、だれも思いつかない方法で、「他人に不法を行なわない限りの自由」を見つけてきた。それは今も昔も、変わらない。

この展覧会「類比的の鏡／The Analogical Mirros」は、そんなアーティストたちの、だれも思いついたことがない「これはいいでしょ?」という「光」を集めた公園みたいなものなんだ。山中suplexという比叡山のふもとにあるアトリエに来れば、たくさんの芸術作品と出会うことができる。もしかすると、その体験は少し怖いものになるかもしれないけれど、向かい合った鏡と鏡の奥からの明かりは、決して単なる「不自由さ」への対策ではなく、希望的な反射となって、再び目の前を照らし出すかもしれない。

ただ今は、ぼくたちも大切なものを守るため、あなたはこの展覧会に自動車でしか来ることができないけど、もし運転免許証や車がなかったとしても、誰かに「行きたい」とだけは強く伝えてほしい。きっとあなたの好奇心が動力となって、別の誰かの視線や身体を動かすだろうから。

堤 拓也(本展キュレーター)

[キュレーターズ・テキスト2]

かつて共産主義・社会主義といった思想界からの挑戦があったように、新型コロナウイルス感染拡大は、脱身体化の極致であるグローバリゼーションそのものに対する自然界からの批判であると考えられる。それを踏まえた本展「類比的の鏡／The Analogical Mirrors」は、COVID-19という存在に対する、芸術技法と肉体労働を駆使した美術界からの返答であり、1492年に西ヨーロッパがアメリカ大陸を経済的合理性に基づき植民化し始めたことに端を発する「地球村」について別角度から見つめ直すための空間となることを目論む。さらに、感染症予防対策としてのドライブイン形式を遂行する一方で、これまでは芸術作品がガラスケース内にテグスで固定されていたにも関わらず、今度は人類が保護・隔離される対象となった現状において、シートベルトで車内に拘束される個人の身体と、自動車という集団を格納できる躯体に向けた作品形式、および鑑賞体験の違いを考察する。

あるいは一方で、COVID-19というウイルスが突如消滅するという奇跡が起きた場合に、このドライブイン形式の自律性はどれほど確保できるのか。はたまた、自動車を持たない鑑賞者はそもそも展示を観ることができないのか。しかしそれは逆に、一度乗車こそしてしまえば、MoMAが開発した近代的な展示方法では体格の面で計上されていない鑑賞者(子ども、女性、車椅子利用者、老人)を包括することにはならないか。飲食や会話が可能な車内では、美術館よりも自由に振る舞えるのではないか。もしくは、地方において自家用車の所有が家族からの独立性をしめす指標であると同時に、運転免許証が日本社会で何よりも有効な身分証明書となる現況において、芸術鑑賞主体としての個人性と、社会通念上の成人性はどのような関係があるのか、等々の議題も扱えるかもしれない。

本展覧会を通じ、オンライン空間とは異なるコロナ禍での現実的な実施方法を美学的視点を交え探求し、ひとつの展覧会のサンプル、あるいはキュレーティング手法を現代社会に提案する機会になることを目指したい。

堤 拓也(本展キュレーター)















[公開されている展覧会レビュー]

○日本経済新聞「大津市でドライブイン美術展、乗車したまま鑑賞」

<https://www.nikkei.com/article/DGXMZO66410830Z11C20A1BE0P00>

○ドライブイン展覧会「類比の鏡／THE ANALOGICAL MIRRORS」

<https://www.ameet.jp/feature/3149/>

○グローバリズムの裂け目から見る合わせ鏡 — ドライブイン展覧会「類比の鏡／The Analogical Mirrors」

<https://uryu-tsushin.kyoto-art.ac.jp/detail/747>